



記入日 20 年 月 日

1. 概要

実践団体名	鈴木健介		
連絡先	※代表者または担当者の連絡先電話番号 045-507-7395		
プランタイトル	学校における災害発生直後の対応（緊急度判断・応急処置・搬送）		
プランの対象者※1	教職員	対象とする 災害種別※2	災害全般

※1 別紙「記入上の留意点」の1. 項目から選択し、記入してください。（複数選択可）

※2 別紙「記入上の留意点」の2. 項目から1つ選択し、記入してください。

【プランの目的・ここがポイント！】

「緊急・災害時に助け合い安心できる学校にする」を目的に活動している。
 災害が発生した時に、
 「養護教諭を中心とした教職員が適切な緊急度判断・応急処置・搬送ができるか」
 「学校として災害時に対応できるか（体制が確立されているか）」という課題を解決するために「学校における災害時の対応」をテーマにした講習会を行っている。
 「緊急度判断」の実技を中心に講習会を行っているのがポイントである。

【プランの概要】

90分で完結するトリアージ講習会プログラムを行い

- ①災害直後に発生する多数傷病者に対応できるシステムを構築するために必要な知識を習得する
- ②緊急度評価・応急処置・搬送の知識と技術を習得する

項目	内容	時間(分)
トリアージとは	トリアージの定義と必要性について説明 トリアージの法的責任について説明	15
トリアージとシステムの重要性	学校での事故事例と過去の判例から求められる救急処置の説明 東日本大震災の事例の説明 平時の緊急時から対応できるシステムの必要性を説明	15
START法トリアージ	START法トリアージの説明 (医療従事者・消防機関が行うトリアージの説明)	10
緊急度評価	START法トリアージを基にした 緊急度評価の方法の説明	10
緊急度評価実習1	2人組グループを作成し、患者役・救護者役に分け、観察練習を行う	5
緊急度評価実習2	患者役・救護者役を交代し、観察練習を行う	5
全体シミュレーション1	全体を2グループにして、患者・救護者チームに分け、大地震の超急性期を想定したシミュレーションを行う。患者チームは好きな患者を演じる。救護者チームは、リーダーを決めて緊急度判定結果をまとめる。最終的に患者役が意図した緊急度と救護者側が判断した緊急度の人数が一致するか検証する	12
全体シミュレーション2	全体シミュレーションと役割を交代してもう一度実施する	12
まとめ	全体のまとめ・質疑応答	6

【期待される効果・ここがおすすめ！】

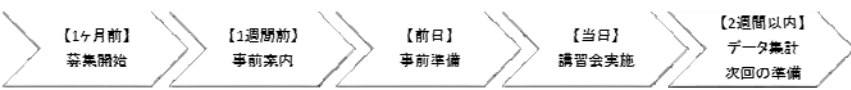
1. 日常生活における負傷者対応意識の向上、災害時における多数傷病者対応意識の向上
2. 作成した教育コースにより、緊急度評価・応急処置・搬送の知識と技術を習得
3. 作成した教育コースにより、多数傷病者対応システムの構築のための知識技術を習得

2. プランの年間活動記録 (2015 年)

	プランの 立案と調整	準備活動	実践活動
4月			
5月			
6月	6月29日(月) 募集方法・講習会内容について打ち合わせ実施		
7月		7月20日(月) 募集方法・講習会内容(講義スライド・実習方法・アンケート等)について打ち合わせ実施	
8月			8月10日(月)に36名、8月24日(月)に27名対象に、災害時の対応講習会を実施した。
9月			8月に実施した講習会のアンケート集計・データ解析を実施
10月		10月18日(日) 募集方法・講習会内容について打ち合わせ実施	
11月			11月22日(日) 講習会実施
12月			11月に実施した講習会のアンケート集計・データ解析を実施
1月		1月24日(日) データ集計 打ち合わせ実施	1月24日(日) 講習会実施
2月		2月20日(土) 打ち合わせ実施 来年度の活動計画作成	
3月			

3. 実践したプランの内容と成果

【実践プログラム番号：_____】※3

タイトル	学校における災害時の対応講習会
実施月日（曜日）	8月10日（月）・24日（月）、11月22日（日）、1月24日（日）
実施場所	日本体育大学健志台キャンパス9号館
担当者または講師	担当者・講師等の区分： 氏名：鈴木健介・木村純一 所属・役職等：日本体育大学保健医療学部・助教 氏名：木村純一 所属・役職等：東京都立町田の丘学園
所要時間または「コマ数×単位時間」	13：30～16：30（3時間）
プログラムのカテゴリ、形式※4	講習会・学習会・ワークショップ
活動目的※5	技術を身につける
達成目標	①災害直後に発生する多数傷病者に対応できるシステムを構築するために必要な知識を習得する ②緊急度評価・応急処置・搬送の知識と技術を習得する
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	
準備、使用したもの・人材・道具、材料等	日本体育大学健志台キャンパス9号館臨地実習室 高機能シミュレーター-Resusci Anne Simulator®Laerdal 20体 日本体育大学保健医療学部救急医療学科学生 10名 女子栄養大学学生 10名
参加人数	計76名（8月10日36名、24日27名、11月22日13名）
経費の総額・内訳概要	0円
成果と課題	【成果】養護教諭が緊急度判断を行う自信が向上し、今後の対応時に呼吸や脈拍を観察するという動機付けができる可能性がアンケート結果から得られた。 【課題】養護教諭が自校で講習会を行うために教材とインストラクター講習会が必要である。
成果物	講習会資料、呼吸脈拍の観察達成度シート

※3 本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。

※4 別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。（複数選択可）

※5 別紙「記入上の留意点」の4. 項目から1つ選択し、記入してください。

4. 苦勞した点・工夫した点

<p>プランの立案 と調整で 苦勞した点 工夫した点</p>	<p>【苦勞した点】 普段の業務がある中で、プランの立案をする時間を確保するのに苦勞した。また、打ち合わせの日程調整も同様に苦勞した。</p> <p>【工夫した点】 インターネット会議や web 上の共有フォルダーを活用して情報共有を行った。 チャレンジプランとは別に、学校保健部会や養護教諭部会で講演依頼があった。その講演中や講演後のアンケートで、①講習会の開催時期、②学校の災害マニュアルの有無、③防災訓練の工夫、④学校教職員や管理職のニーズ等災害時の対応に関する養護教諭・学校教職員のニーズを調査できた。 養護教諭養成大学の教授、救急専門医、小児科医、救急救命士の専門家の協力を得て、それぞれの立場からの意見を基に、プランを立案することができた。また「根拠」を作るために統計解析を踏まえたデータの取り方を、専門家に相談した。</p>
<p>準備活動で 苦勞した点 工夫した点</p>	<p>【苦勞した点】 講習会のポスターを作成し受講生を募集した。メール、FAX、ホームページの 3 つの方法があったが、それぞれで募集したため、1つのリストにまとめるのに苦勞した。また、リスト作成後、講習会 1 週間前に事前案内を出し、配布資料を印刷等少人数で行ったため、非常に負担が大きく苦勞した。</p> <p>【工夫した点】 メールやホームページからの募集を強化し、web 上の入力フォームを活用した。リスト作成時間を短縮することができた。</p>
<p>実践に 当たって 苦勞した点 工夫した点</p>	<p>【苦勞した点】 エクセルとワードのマクロ機能を作成し正しく機能するかを検証するために、事前に何度もテストした。</p> <p>【工夫した点】 補助学生の協力によりデータを効率的に集めることができた。また、マクロ機能を活用して解析することで、講習会終了までに受講生本人にフィードバックすることができた。その結果、後日郵送するための手間とコストを削減することができた。</p>

5. 他の団体、地域との連携

協力・連携先の分類	団体名、組織名	協力・連携の内容
学校・教育関係・ 同窓会組織	女子栄養大学保健養護学研究室 (教授 遠藤伸子先生) 日本体育大学保健医療学部 救急医療学科学生 日本医科大学多摩永山病院 救命救急センター (医局長久野将宗先生)	養護教諭監修 講習会運営スタッフ 救急医学監修
保護者・ PTAの組織		
地域組織	大田市消防本部 (原田孝様)	救急救命士の視点からの 連携体制に関する助言
国・地方公共団体・ 公共施設		
企業・ 産業関連の組合等		
ボランティア団体・ NPO法人・NGO 等		
職業、職能団体・ 学術組織、学会等		

6. 成果と課題（実践したプラン全般について）

<p>成果として 得たこと</p>	<p>8月10日（月）・24日（月）・11月22日（日）に講習会を行い、合計76名の養護教諭が参加した。（1月24日（日）に実施予定）講習会実施前後のアンケートで比較すると、「緊急度判断」・「呼吸の観察」に関して「自信をもって評価できる」という回答が有意に増えた。「脈拍の観察」に関しては「自信をもって評価できる」という回答は増えたが有意な差は認められなかった。「呼吸の観察」・「脈拍の観察」の頻度は、有意に増加し講習会後はすべての養護教諭が「ときどき」・「たいてい」・「いつも」観察すると回答した。</p> <p>講習会を行うことで、養護教諭が緊急度判断を行う自信が向上し、今後の対応時に呼吸や脈拍を観察するという動機付けができる可能性が成果として得られた。</p> <p>アンケートの自由記載から、講習会内容が養護教諭のニーズに合致していることが考えられた。また、養護教諭だけでなく学校教職員や管理職の教員向けに行ってほしいというニーズがあることが明らかになった。</p>
<p>全体の反省・ 感想・課題</p>	<p>事務的なものをすべて2人で行ったため、かなり労力を取られた。しかし、この活動の目的に賛同した養護教諭、救急医、小児科医、救急救命士、学生等が協力してくれた。</p> <p>講習会の対象が養護教諭のみであったが、講習会を4回開催できたことから、当初計画した70%は達成できたと考える。講習会の対象を、学校教職員や児童生徒、保護者と拡大していける手ごたえを掴むことができた。</p> <p>今後は、養護教諭や学校教職員・管理職の先生からのニーズに答えられるよう、組織を作り、災害時に助け合い安心できる学校づくりに貢献したい。</p>
<p>今後の 継続予定</p>	<p>来年度は「教えられる学校教職員が増える」をキーワードとして、</p> <ol style="list-style-type: none"> ①講習会プログラムのパッケージ化（映像教材、読み原稿付きスライドの作成） ②ホームページの充実と資料提供方法の確立、 ③インストラクター講習会の開催 <p>を検討している。また、より効率的に運営していくために、組織化が必要だと考えている。NPO化や学会の委員会で運営する等、最短距離で「緊急・災害時に助け合い安心できる学校にする」という目的を達成するための手段を検討していきたい。</p>

7. 自由記述欄 ※6

※6 自由記述欄は、防災教育の実践で得られた知見、防災教育の普及に関わる提案等を盛り込んでください。また、前頁までの記述に不足した事項、参考資料、写真等を自由にご記入ください。なお、3ページ以内厳守をお願いします。

【防災教育の実践で得られた知見】

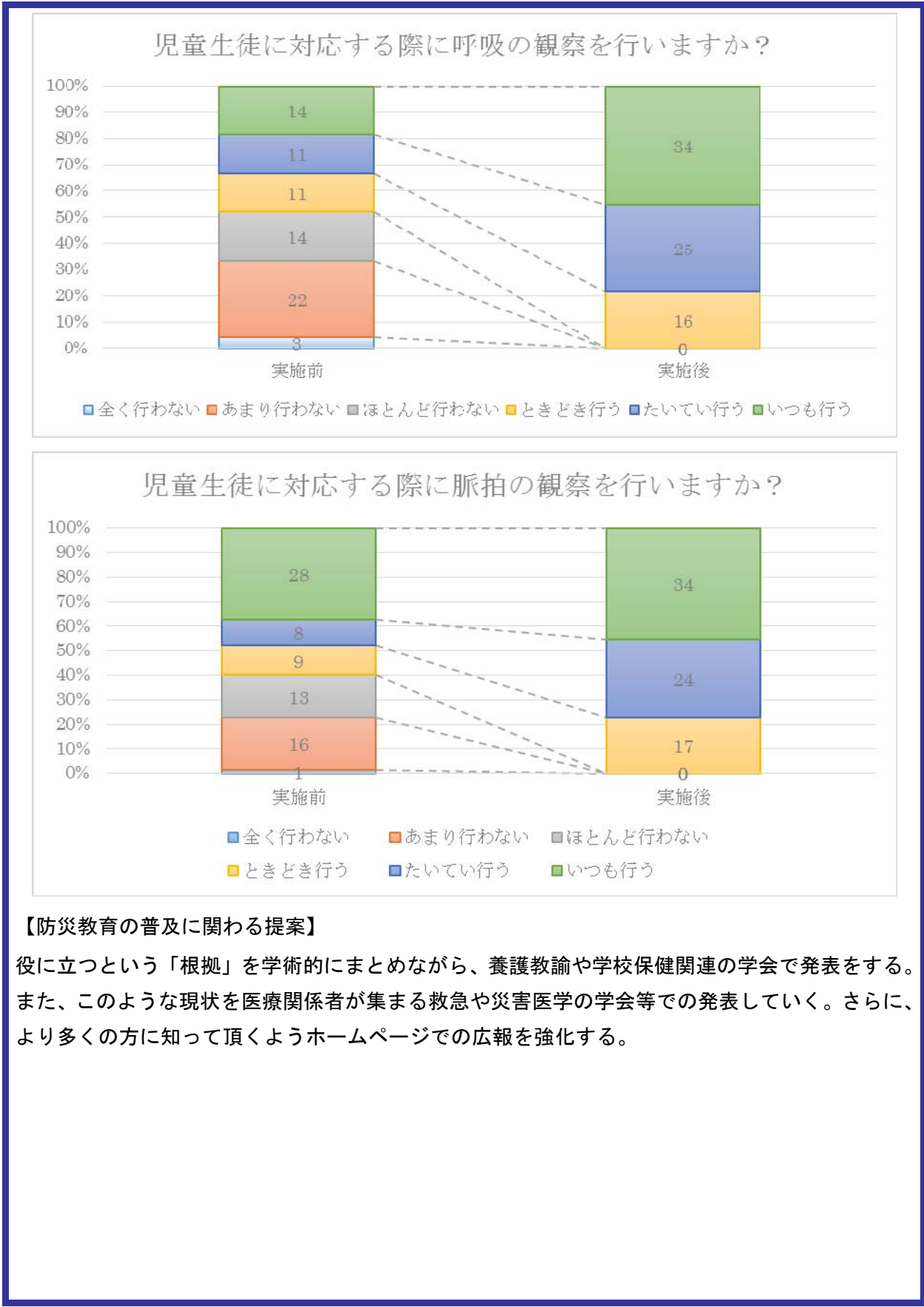
学校における災害時の対応講習会を実践することで、**養護教諭が緊急度判断を行う自信が向上し、今後の対応時に呼吸や脈拍を観察するという動機付けができる可能性が示唆された。**学校管理下で災害が発生した場合に、**救命できる児童生徒が増える**ことが期待できる。講習会実施前後でアンケートを行った結果を示す（76名に実施し75名から有効な回答を得た）。

「緊急度評価」を行う際に自信がありますか？	実施前	実施後
まったく自信がない	2	0
あまり自信がない	16	11
どちらかといえば自信がない	21	6
どちらともいえない	25	24
どちらかといえば自信がある	11	33
かなり自信がある	0	1
非常に自信がある	0	0

「呼吸の観察」を行う際に自信がありますか？	実施前	実施後
まったく自信がない	5	0
あまり自信がない	19	6
どちらかといえば自信がない	20	8
どちらともいえない	24	21
どちらかといえば自信がある	6	40
かなり自信がある	0	0
非常に自信がある	1	0

「脈拍の観察」を行う際に自信がありますか？	実施前	実施後
まったく自信がない	3	2
あまり自信がない	13	13
どちらかといえば自信がない	13	8
どちらともいえない	25	21
どちらかといえば自信がある	19	28
かなり自信がある	2	3
非常に自信がある	0	0

(自由記述: 1/3)



【防災教育の普及に関わる提案】

役に立つという「根拠」を学術的にまとめながら、養護教諭や学校保健関連の学会で発表をする。また、このような現状を医療関係者が集まる救急や災害医学の学会等での発表していく。さらに、より多くの方に知って頂くようホームページでの広報を強化する。

(自由記述: 2/3)



(自由記述: 3/3)